

## 中国大陸における日本文学の教科書について ——志賀直哉の作品「城の崎にて」を中心に——

呉 保華

### 1. はじめに

管見の限りでは、1923年6月に上海商務書局により出版された『現代日本小説集』の中に収録されている「網走まで」<sup>1</sup>と「清兵衛と瓢箪」<sup>2</sup>が、中国大陸において最初に翻訳された志賀直哉の作品であろうと思われる。この小説集は周兄弟（魯迅、周作人）の手によって翻訳された日本人小説家15人の30篇の作品集であり、中国大陸で最初に出版された日本の小説集でもある<sup>3</sup>。中には、白樺派関係者の武者小路実篤、有島武郎、志賀直哉、長与善郎、千家元麿ら五人の作品の中国語訳が各々2編ずつ収録されている。直哉の両作品は周作人が翻訳したものであり、「網走まで」は1921年4月10日の『小説月報』第12巻第4号に、「清兵衛と瓢箪」は9月20日、21日、22日と、三日間連続して『晨报副鵬』に掲載されている。1921年は両作品の中国語訳の初出年に当たっていると言えよう。それ以来、九十年余の歳月が過ぎた今日では、直哉の唯一の長編小説「暗夜行路」、中編小説「和解」といった所謂名作はもとより、中国大陸においてあまり論議されていない多くの短編小説・小品、例えば、「佐々木の場合」「轉生」「或る親子」「朝顔」「鴉の子」「兎」のような作品までも中国語に翻訳・出版されている。しかし、残念なことに、その中に中日両国においてすでに高い評価を受けている「城の崎にて」の中国語訳はまだ見られないのである<sup>4</sup>。この点については、拙稿文末の付表I「志賀直哉作品の翻訳リスト（中国大陸）」<sup>5</sup>を見れば、一目瞭然であろう。この付表Iは、主に中国大陸において現在（2011年9月）までに翻訳された志賀直哉の作品を纏めたものである。ざっと調査した程度だが、中国大陸だけでも35作品に上っており、直哉の作品全体の四分の一弱を占めている。

それにしても、この高名な「城の崎にて」は、中国大陸の各大学の日本語学部高学年或いは修士課程で使用されている教科書には常に日本の心境小説の代表作として登場している。すなわち教育現場において、日本近代文学における最も有名な短編小説の一作品として、伝播・翻訳・論議されてきた。筆者もこの現場の一介の伝播者であり、すでに何度もこの作品を取り上げ、上海交通大学日本語学部高学年の学部生と当学部修士課程の院生たちの前で講じてきた。年年歳歳使用した「城の崎にて」<sup>6</sup>は不変であるが、歳歳年年講じた内容は、

1 1910年4月に同人誌「白樺」創刊号に発表され、所謂志賀直哉の三つの処女作中の一つで、最初に公にされた作品である。

2 1913年1月に「読売新聞」に発表されている。現在、本作の中国語訳は中国大陸高校二年生の国語教科書の副読本『外国短編小説集』に収録された唯一の日本人小説家の作品である。

3 康東元『日本近・現代文学の中国語訳研究』上海交通大学出版社 2009年9月 23頁 参照

4 管見に入る限り所謂「複数作家の小説集」の翻訳或いは「志賀直哉の作品集」の翻訳には「城の崎にて」の中国語訳が未だ見られないのである。しかし、2010年2月に華東理工大学出版社により出版された『日本文学教程』（張予娜主編）という教科書の中に「城の崎にて」の中国語訳がすでに収録されている。

5 主に康東元の『日本近・現代文学の中国語訳総覧』（勉誠出版 2006年1月）111～113頁のデータに依る。

6 常に使用したテキストは『志賀直哉全集』（1983年4月～1984年6月第2刷発行）第二巻に収録されているそのものである。

作品解釈と鑑賞体験が積み重なるごとに、多かれ少なかれ変化しつつある。この「不変」と「変化」の渦中を往来する伝播者である筆者自身には、馬齢を重ねる感があるものの、この作品を或る程度少しずつではあるが以前よりも理解できるようになった実感もある。

周知のように、文化が伝播する経路は多種多様だが、異文化が伝播するプロセスの中で重要な役割を果たしている教科書は、異文化がその国によく理解されたか否かを判定するバロメーターのような存在であろう。したがって、本稿の考察の素材として、『志賀直哉全集』<sup>7</sup>と中国大陸の日本文学教育の教科書に収録されている「城の崎にて」を取り上げながら、主にその語句の表記の変化並びにそれに関する解釈を中心に日本文学受容の際の問題点を考察してみたいと思う。

7

注6に同じ。

## 2. 中国大陸における「城の崎にて」の表記の変化

中国大陸の日本文学教育の教科書に収録されている「城の崎にて」の表記の変化を検討する前に、まず日本における「城の崎にて」の表記の変化を簡単に紹介してみたいと思う。

『志賀直哉全集』は改造社刊九卷本全集(1937年11月～1938年6月)の他に、岩波書店により過去三度にわたり刊行された。一度目は1955年～1956年に、二度目は1973年～1983年に、三度目は1998年～2002年に刊行された。

表 「城の崎にて」における表記の変化

変化分類	「城の崎にて」A	「城の崎にて」B
平仮名	はね(飛ばされて)	跳(飛ばされて)
	わき	傍
	み(つける)	見(つける)
	うつ(向き)	俯(向き)
	ちぢめた	縮(めた)
	しゃがむ	踞(む)
	いもり	蝾螈
	やもり	屋守
片仮名	ハッキリ	明瞭
	ボンヤリ	ぼんやり
	シッカリ	しっかり
	ヒドイ	ひどい
	キョロキョロ	きよろきよろ
	スponsポン	スポッ、スポッ
	ソワソワ	そわそわ
	トカゲ	蜥蜴
その他	コッ	こッ
	ヂッと	凝然と
	ダラシなく	だらしなく
	コビりついた	こびりついた
	ハネ返った	跳ね返った

そこで例えば、1918年1月に新潮社により刊行された直哉の作品集『夜の光』に収録されている「城の崎にて」(以下「城の崎にて」Aと呼ぶ)と岩波書店の二度目の『志賀直哉全集』第二巻に収録されている「城の崎にて」(以下「城の崎にて」Bと呼ぶ)とを比較してみる。比較して容易に察することができるように「城の崎にて」Aで使用されている多くの言葉の表記は「城の崎にて」Bでは改められている。その変化した様子を検討する便宜上、筆者はそれを三つに分類し、代表的な例を中心に次表のように纏めてみた。

表に示したように、「城の崎にて」Aにおいて使用されている平仮名で表した文字は、「城の崎にて」Bにおいては殆ど相対応した漢字に書き直されている。例えば、小動物の「いもり」「やもり」は、それぞれ「蝾螈」「屋守」に改められており、本文中に現れる他の小動物「山女」「蜂」「鼠」の表記と同じように全部漢字表記に統一されている。その他、「城の崎にて」Aにおける片仮名語、或いは平仮名と

片仮名を織り交ぜた表記の多用も「城の崎にて」Bにおいては推敲を重ねたと  
思われる表記で書き直されている。「城の崎にて」Aの表記は、志賀直哉が三年  
間の沈黙の後、創作意欲が再燃し、小説の執筆活動に取り掛かり始める年  
1917年の翌年1月のものではあるものの、直哉初期の作品表記の面影<sup>8</sup>を色濃  
く継承していると思われる。それは明らかに「城の崎にて」の深層に流れている  
「静かさ」「寂しさ」といった雰囲気にはあまり相応しくないと考えられる。  
したがって、「城の崎にて」Bのような改変は「城の崎にて」Aにおける強調され  
た雰囲気が相対的に柔軟化されており、作品内部の辻褄の合わなかった表記も  
相対的に減らされている。ちなみに、この作品の中で「静かさ」「寂しさ」という  
語が使われている部分は、19箇所上っている。

漢字表記に関する論については後に触れるが、次に、本作品の具体的な内容  
に即して仮名の表記の変化を大雑把に纏めてみることにする。本小説の展開部  
分には、子供二、三人と四十ぐらいの車夫一人が川に投げ込まれた鼠を狙って  
石を投げる光景が、上記の両版本において次のように描かれている。

子供や車夫は益々面白がつて石をなげた。ワキの洗場の前で餌を漁つてみ  
た二三羽の家鴨が石が飛んで来るので吃驚して首を延ばしてキヨロキヨロ  
とした。スponsポンと石が水へ投込まれた。家鴨はとんきょうな顔をし  
て首を延ばしたまゝ、鳴きながら、忙しく足を動かして上流の方へ泳いで  
行つた。(「城の崎にて」A：『夜の光』179頁、傍線具)

子供や車夫は益々面白がつて石を投げた。傍の洗場の前で餌を漁っていた  
二三羽の家鴨が石が飛んで来るので吃驚し、首を延ばしてきよろきよろと  
した。スポッ、スポッと石が水へ投げ込まれた。家鴨は頓狂な顔をして首  
を延ばした儘、鳴きながら、忙しく足を動かして上流の方へ泳いで行つた。  
(「城の崎にて」B：『志賀直哉全集』178～179頁、傍線具)

片仮名語の「キヨロキヨロ」は平仮名語の「きよろきよろ」に書き直されてい  
る。ここでは驚かされ慌ててあたりを見回しているあひるの緊張した様子が活  
写されている。本来柔軟性があるはずのあひるの首も平仮名の表記法により柔  
らかくなったような感じになる。「城の崎にて」Aにおいて片仮名語により生成  
したあひるの首の硬い感じのイメージは「城の崎にて」Bにおいて徹底的に遮断  
されている。

「スponsポン」が「スポッスポッ」に変えられた例であるが、両者を比べてみ  
れば、「スponsポン」の方に撥音「ン」が二つ入っているので、その音声から容  
易に石の量感が感じられやすくなり、四十ぐらいの車夫一人だけが大きな石を  
間を取って投げるようなイメージの発生を伴ってもおかしくないはずである。  
この場面は二、三人の子供たちが面白がつてした悪戯行為だから、先を争って

8

直哉初期の作品の表記法については、吉田精  
一は次のように指摘している。「それだけに  
場合によっては神経がチラチラしすぎて、う  
るさく感ぜしめることがないでもない。」と言  
う。(「白樺に於ける志賀直哉」日本文学研究  
資料刊行会編 『日本文学研究資料叢書 志  
賀直哉I』に所収 有精堂 1977年4月1日  
4版発行 21頁 参照)

鼠を狙って小さな石を投げるようなイメージであろう。したがって、擬音語の使用効果から考えてみると、やはり「スポッスポッ」の方はスピード感がある、小さな石が水を切る音声である<sup>9</sup>。子供たちの仕業に相応しい描写だと言えるよう。

とにかく、「城の崎にて」Bは、その表記法の些かな改変により、描写的的確さ、特に擬音語の選択の巧みさにおいて「城の崎にて」Aの表記効果を一段としのいでいる。

筆者はここで、上述した日本における「城の崎にて」の表記の変化を念頭に、中国大陸における「城の崎にて」の表記の変化を考察してみたいと思う。筆者は中国人の伝播者の手によって編著(翻訳)された日本文学教育の教科書を、14種類調査してみた。その中で「城の崎にて」が収録されている教科書は13種類にのぼる。拙稿文末の付表Ⅱに、13種類の教科書リストを纏めておいた。各教科書に収録されている「城の崎にて」の関連部分は、大体本文、単語の読み方と語釈、直哉の略歴、本文に関する設問などから構成されている。

ここで13種類の教科書に基づいて纏めたデータを披露するのは多少躊躇するのだが、13種類の教科書中の12種類は、教科書本文の底本に関する情報が皆無である。即ち、教科書に引用された「城の崎にて」が、いつ出版された「城の崎にて」を底本にしているかは、明らかではないのである。それを取り上げて記載しているのは前述した『日本文学教程』という教科書だけである。それだけでなく、一部の教科書の中では文の長短、言葉の表記、漢字の配列などが改変されている。例えば、13種類の教科書中の4種類では「山の手線の電車に跳飛ばされて怪我をした、其後養生に、一人で但馬の城崎温泉へ出掛けた。」(「城の崎にて」B:『志賀直哉全集』175頁)という文は二分され、「山の手線の電車に跳飛ばされて怪我をした。」のように前半部分に句点が打たれている。両者を比べてみれば、やはり読点で繋いだ前者の文はいかにも志賀直哉らしく、省筆・省略された文となっている。それは直哉が文章を簡潔に表現しようとする意識の表れであり、まさに「自在、絶妙、天衣無縫、に句読を打った」<sup>10</sup>表現と言えよう。「山の手線の電車に跳飛ばされて怪我をした」を一つの独立した文とするならば、そのすぐ後に来る文の内容も改めて推敲し直さなければならないであろう。なぜなら、一篇の短編小説の第一段落の一つ目の文は言うまでもなくとても大切な働きを持っており、ごく小さな部分を動かしても、その影響は小説の構成乃至全体に及ぶのではないかと思われるからである。このような改変例は、中国大陸の教科書のみならず、伊藤整の名著『文学入門』(光文社、1954年初版、1956年改訂版)に引用された「城の崎にて」においても見ることができる。

今、中国大陸の教科書における「城の崎にて」(付表Ⅱ)を考察の素材として、改変された実例を挙げてみよう。

①漢字配列の変化の例

「一つ間違えば、今頃は青山の土の下に仰向けになって寝ている所だったな  
 と思う。」と「その傍に一疋、朝も昼も夕も、見る度に一つ所に全く動かずに俯  
 向きに転っているのを見ると、それが又如何にも死んだものという感じを与え  
 るのだ。」(「城の崎にて」B)という文における「**仰向け**」は「**あおむけ**」或いは  
 「**あお向け**」に、「**俯向き**」は「**うつむき**」或いは「**うつ向き**」に改変された。上記  
 13種類の教科書の中で、10種類はこのように改変されている。無論、それぞれ  
 違う段落に入っている文中の漢字の表記は、一見無関係と思われるものよう  
 であるが、実際のところ、小説の全体の構成の中で「**仰向け**」と「**俯向き**」の漢  
 字表記を互いに呼応し合わせた作者の意図は明らかで、疑う余地がないのであ  
 る。このようなバランスのとれた漢字の配列から、直哉の持っているある種の  
 漢字に関する美意識が読み取れるのではないかと思われる。

②もう一つの漢字配列の例

「山の裾を廻っているあたりの小さな潭になった所に山女が沢山集っている。  
 そして尚よく見ると、足に毛の生えた大きな川蟹が石のように凝然として居る  
 のを見つける事がある。」(「城の崎にて」B)という部分では、漢字の「**山女**」  
 と「**沢山**」はそれぞれ平仮名「**やまめ**」と「**たくさん**」に変えられている。本文  
 のバランスが取れた、対称性がある漢字配列の美しさがここで消えてしまう。  
 勿論、編著者が現代日本語の漢字表記の制限ルールに従ってとった決断かも  
 もしれないが、漢字がなければ筆者のような中国人読者にとっては想像力が阻  
 害されてしまいがちになるのを忘れてほしくない。筆者は脳裏にある関連知  
 識を基に想像力を駆使してこの部分の構図を吟味してみる。清水正の言を借  
 りて言うと、「その構図が暗示的で面白い」<sup>11</sup>のである。即ち、「足に毛の生え  
 た大きな川蟹」が山女と同じ潭(ふち)に泊まっているという構図から色々な  
 想像ができる。例えば、志賀直哉の交通事故前後の実生活と合わせて解釈し  
 たらどうだろうか。当時の様子は1913年8月17日の日記に記されている。負  
 傷して東京病院へ入院した志賀直哉は、入院中であっても「まだ自分でからだ  
 を動かさない。背中に四つ頭に二つの氷のうを当て、氷枕をしている、さうい  
 う自分に矢張り性欲はあつた」<sup>12</sup>という状態であった。日記の内容と交通事故  
 による背中のひどい傷の状況からみると、入院中の直哉は四つ這いになって  
 いる姿勢だったろう。それは丁度石のようにじっとしている川蟹のイメージに  
 合致しているのではないかと思われる。その他、直哉が病院を退院した後も  
 東京病院と順天堂病院とへ通院するのが日課になっていた。順天堂病院通い  
 は交通事故後入院で中断したどうも口に出しにくいある病気の治療再開のた  
 めであった。1909年(26歳)3月より直哉は花柳界に出入りし、多くの女性  
 に惹きつけられていた。遊びの結果、一年後、陰で「**男の勲章**」とも言われる  
 独身青年のあの病気に罹り、医者へ通い始めたのである<sup>13</sup>。今回の治療は一度

11  
 『志賀直哉——自然と日常を描いた小説家』  
 星雲社 2005年11月 15頁 参照

12  
 『志賀直哉全集 第十巻』岩波書店 1983年  
 4月～1984年6月第2刷発行 696頁 参照

13  
 本多秋五『志賀直哉上』岩波新書 1990年  
 1月 161～162頁 参照

治りかけたのを再感染したためである。したがって、このような状況を含めて考えてみれば、この小説に登場している点景小動物の山女と川蟹は、それぞれ女性的存在と男性的存在の隠喩として理解してもよいのではないかと思う。「山女」という漢字の表記がなければ、筆者のような中国人読者の解釈は、ただ魚の一種（中国語では“真鱒”と言う）という意味だけにとどまるのではないだろうか。

もう一つ大切な擬音語の用例であるが、「石はこつと行ってから流れに落ちた。」という文における平仮名と片仮名を織り交ぜた「こつ」という擬音語は片仮名語「コツ」に直されている。上記13種類の教科書の中で、7種類はこのように改変されている。この特殊表記法の擬音語に関する解釈は、次の部分で触れてみることにする。

### 3. 語句に関する解釈（翻訳）

#### 「山手線」に関する解釈

名作中の語句は、その時代と共に生きているものが多く、固定観念でその意味内容を考えたり解釈したりすると、時にはどんな間違った解釈を招かないとも限らない。志賀直哉が交通事故にあった1913年ころは、山手線は現在のそれと同じようにすでに循環していたものと思いついでいる中国の読者や教科書の編著者は少なくない。故に、辞書に載っている意味で教科書中の「山の手線」を解釈するのも当たり前だろう。当時の山手線は、現在のように循環はしていなかった。環状に繋がったのは、1925年のことである。上海の地下鉄四号線も同じである。2007年12月28日以前は循環はしていなかった。循環線になったのはそれ以降のことである。上記した13種類の教科書の中で1913年ころの山手線の状況に触れたのは教科書『日本近現代文学選読』の編著者宿久高ただ一人である。

#### 「山の手線の電車で跳飛ばされて怪我をした」の誤訳

中国語では日本語の汽車に相当する言葉を「火車」、自動車のことを「汽車」という。さらにいうとトロリーバスだけを「電車」という。日本では百二十年ほど前からすでに電車が走っているのに、現在電車という語が高い頻度で使用されているのは日常茶飯事でごく普通だが、中国大陸では「電車」という語の使用頻度はまだ高くない。「火車」という語は依然として盛んに使われている。この例のように、解釈においては両国相互の使用頻度の高い言葉が影響を与えあうということ、両国それぞれの近代化の歩みが異なるということ、更に翻訳する場合のその表現記号と表現内容の変容まで深く考慮しなければならないだろう。

教育現場での経験であるが、中国人の学生は日本語も漢字を使用する事から大体の意味を推測できると思込みがちである。確かに場合によっては日本語の文章中の漢字を見ればその大体の意味が推測できるという利点があるが、中国人にとって母国語の中国語の漢字から未知の日本語の言葉の意味を連想・推測するのは、ただ字面だけを見ての当て推量の解釈に止まるしかなく、その国の言語文化の深意を理解できないであろう。筆者が「城の崎にて」をテキストにして講義する前に、嘗て上海交通大学日本語学部高学年約19名の四年生に、辞書を調べないという前提に「山の手線の電車で跳飛ばされて怪我をした」（「城の崎にて」B）という文を翻訳してもらったことがある。最初に予想した通りの結果である。「跳飛」という字面から「山の手線の電車で跳飛ばされて怪我をした」を「从电车跳下（電車から飛び降りる）负了伤」に誤読・誤訳した学生は12名に上っている。ただ筆者の推測だが、年齢層アップとともにこのように誤読・誤訳する読者の比率は一段と高くなる傾向が見られるであろう。このような語彙関係の誤用問題の発生は、単に字面からの理解という単純な要素の影響だけではなく、個人体験、個人・集団・国家の歴史的記憶、各種メディアの影響など様々な要素も誤読・誤訳の内面に介在していると考えられる。複雑で厄介な問題だが、それを論じることは今後委ね、今はただその問題点を指摘するにとどめる。

#### 「自分」と「蝶蝨」について

「城の崎にて」Bは約5280字、11段落で構成されている。特に第8段落の文字数は最も多く、約1500字である。その次に文字数の多い段落は第10段落で、約1260字である。第8段落には漢字表記の「自分」が23個も現れる。第10段落には小動物を表す漢字表記が、「蝶蝨」19個、「蜥蜴」1個、「屋守」1個、「蜂」1個、「鼠」1個、合計で23個も現れる。当該の段落で23回も同じ漢字の「自分」或いは同じ類の小動物の名前の漢字を使っている直哉の短編小説は、この「城の崎にて」Bだけだろう。「自身」という語すら「自分」に見えてしまうくらい頻繁に出現してくるのだ。このようなそれぞれの漢字の使用頻度はどうも直哉が意識しているにちががなく、小説における重要漢字のバランス効果に緻密な計算がある<sup>14</sup>と考えられる。

重要漢字だけではなく、この小説では数字も意識的に使用されているらしい。「一人」「二三年」「三週間」「五週間」「一つ」「二階」「一匹」「三日」「三寸」「二三人」「四十位」「二三羽」「一寸」「四寸」「三年」「十年」というような数字が頻繁に出てくる。そして、「一二三」が出てくる頻度が最も高い。「自分」が眺めた花の名前も「八つ手」、通りかかった銭湯の名前も「一の湯」だから、数字の巧みな使用はここでも徹底化されている。

14

前掲書（注9）の67頁に、「志賀直哉には当然のことながら、意識的にせよ無意識的にせよ効果に対する計算がある」（吉田精一「理想の良識の文章」）のような記述がある。

## 二つの特別表記の擬音語

「細長い羽根を両方へしっかりと張ってぶーんと飛び立つ。」の、「ぶーん」に関する谷崎潤一郎の示唆に富んだ解釈は群を抜いたものである。谷崎潤一郎の『文章読本』に次のような記述がある。

「ぶーん」を「ブーン」と書いたのでは「虎斑の大きな肥った蜂」が空気を振動させながら飛んでゆく羽音の感じが出ない。又「ぶうん」でもいけない、「ぶーん」でなければ真直ぐに飛んで行く様子が見えない<sup>15</sup>。

ここで片仮名の長音符号「ー」の使い方は直截によって生かされて活用されている。擬音語「ぶーん」に関する「ひらがな+カタカナ+ひらがな」というような組み合わせは、小説の細部の描写に優れた手腕を発揮した直截の腕の見せ所だろう。ちなみに、この擬音語を中国語に翻訳するのは相当難しい。中国語訳「喻地一声飞起来」には蜂がまっすぐ飛び立って飛んで行くイメージが読み取りにくい。

その他、第10段落の「石はこつと行ってから流れに落ちた。」という文における「こつ」という擬音語の表記法も優れた使い方だろう。

「城の崎にて」Aにおける片仮名語の「コツ」と、「城の崎にて」Bにおける平仮名と片仮名を織り交ぜた「こつ」との表記法を比べてみれば、やはり前者の音のはっきりとよく響き渡ってくるような感じがする。後者の方は音がよく通らない、反響のない感じがする。投げられたこまりほどの石が蝶螻の体、つまり柔らかいものに当たったというイメージが読み取れる。前述した「スボッポッ」の小さな石の音とを比べてみれば、こまりほどの石が蝶螻の不器用な体に当たった音であろう。或いは、石が「半畳敷程の石」と、その上にいる蝶螻の体に同時に当たったというイメージも読み取れる。後者の表記からこまりほどの石の量感が感じられ、硬い石が柔らかいものに当たった音声効果も読者の視覚を通して伝わってくる<sup>16</sup>。

## 4. 終わりに

筆者は拙稿で、日本における「城の崎にて」の本文表記の変化を念頭に、中国大陸の日本文学教育の13種類の教科書に採用されている「城の崎にて」の表記変化を調査・考察すると同時に、作品の語句の一部についても自分なりの解釈を試みた。筆者も中国大陸の教育現場における日本文学の一介の伝播者であり、13種類の教科書の各編著者の方々が経験された身体的精神のご苦労を大体察知できる。これらの教科書は各々中国大陸の各大学でそれなりの役割を果たしており、日本近現代小説(文化)を解釈・伝播・翻訳するのに重要な貢献をしている。しかし、どの教科書も全体として優れた点が多々ある中で、不備な

15

この引用は前掲書(注9)の67頁に引用されたものを、谷崎潤一郎の『文章読本』(中央公論社 1934年)という原典に遡って調べることなく、そのまま使用するものである。

16

前掲書(注9) 67～68頁 参照



点がないわけではない。誤った注釈や誤訳といったミスの問題は、いつの時代にもどの伝播者にも起こる可能性があるということは、筆者も理解している。しかし、筆者が最も納得できないのはすでに指摘したように、教科書の編著者がどういう意図でそうしたかは良くわからないが、作品の決定稿の表記形式を恣意に変えるというやり方である。

「小説の神様」といわれていた志賀直哉が「日本語でいかに苦闘したか、その努力がいかに大きかったかは」<sup>17</sup>、彼の日記、書簡、草稿、初出、決定稿などを見れば理解できるだろう。彼のどの作品も安易に仕上げられたものではない。「城の崎にて」を例にして言えば、その作品は骨格からその構造の隅々に至るまで、すべてが直哉の労苦の汗により培われた日本的繊細美の結晶であると言えるだろう。「城の崎にて」のような日本の繊細な文化への真の理解に近道はない。あるのは、テキストに向かい、それを精読し、その文中におけるその言語の意味を熟考し悪戦苦闘するという道だけであろう。

17

大野晋 『日本語の練習帳』 岩波新書  
2002年9月第38刷発行 107頁 参照

付表I 志賀直哉作品の翻訳リスト(中国大陸)

原作名	中国語タイトル	翻訳年	訳者名
網走まで	到网走去	1921	周作人
清兵衛と瓢箪	清兵卫与葫芦	1921	周作人
范の犯罪	范某的犯罪	1929	謝六逸
荒絹	荒绢	1935	謝六逸
或る親子	一个人	1935	謝六逸
母の死と新しい母	死母与新母	1935	謝六逸
焚火	焚火	1935	謝六逸
雪の遠足	雪之日	1935	謝六逸
正義派	正义派	1935	葉素
老人	老人	1935	葉素
濁った頭	混浊的头脑	1935	葉素
真鶴	真鹤	1935	葉素
小僧の神様	学徒的菩萨	1935	葉素
佐々木の場合	佐々木の遭遇	1935	葉素
轉生	转生	1939	錢稻孫
赤西蠣太	赤西蛎太	1956	楼適夷等
和解	和解	1956	楼適夷等
十一月三日午後の事	十一月三日午后的事	1956	楼適夷等
流行感冒	流行性感冒	1956	楼適夷等
灰色の月	灰色的月亮	1956	楼適夷等
朝顔	牽牛花	1981	楼適夷
鴉の子	乌鸦之子	1935	葉素
兔	兔子	1935	葉素
目白と鶴と蝙蝠	绣眼、白头翁和蝙蝠	1935	葉素
子供四題	孩童四则	1939	錢稻孫
蜻蛉	蜻蜓	1956	楼適夷等
山鳩	山鸠	1956	楼適夷等

矢島柳堂	矢島柳堂	1956	楼適夷等
白藤	白藤	1956	楼適夷等
赤い帯	红丝带	1981	楼適夷
鶺鴒	鶺鴒	1956	楼適夷等
百舌	伯劳鸟	1956	楼適夷等
秋風	秋风	1956	楼適夷等
濠端の住まひ	住在沟沿	1981	楼適夷
暗夜行路	暗夜行路	1985	孫日明

付表Ⅱ 中国大陸日本文学教育の教科書リスト

教科書名	収録近現代小説数	出版年月	出版社	編著者
日本文学	10	1996年11月	北京大学出版社	劉利国
日本近代文学選読	10	2001年 1月	上海訳文出版社	共同執筆
日本現代短編名作賞析	10	2005年 6月	南開大学出版社	由同来
日本現代文学選読 (上巻)(修訂版)	11	2006年 5月 第2版	北京大学出版社	于荣胜
日本近代文学	17	2006年11月	南開大学出版社	王之英
日本文学選読	17	2007年11月	对外經濟貿易大学 出版社	傅荫
日本文学選集	23	2008年 4月	外語教学与研究出版社	趙曉柏、 応傑、 陶振孝
日本近現代文学選読	12	2009年 4月	外語教学与研究出版社	王志松、 林濤
日本文学選読	11	2009年 6月	北京大学出版社	于荣胜
日本近現代文学精読	22	2009年 7月	南京大学出版社	王述坤
日本文学	11	2010年 1月	北京大学出版社	劉利国
日本文学教程	7	2010年 2月	華東理工大学出版社	張予娜
日本近現代文学選読	25	2010年 6月	北京語言大学出版社	宿久高

使用テキスト

- 『夜の光』新潮社 1918年1月
- 『志賀直哉全集』岩波書店 1983年4月～1984年6月第2刷発行
- 『日本文学教程』張予娜主編 華東理工大学出版社 2010年2月

参考文献

- 本多秋五 『志賀直哉上』岩波新書 1990年1月
- 大野晋 『日本語の練習帳』岩波新書 2002年9月第38刷発行
- 呉谷充利 『志賀直哉、上高畑の「サロン」をめぐる考察』創元社 2003年3月
- 清水正 『志賀直哉——自然と日常を描いた小説家』星雲社 2005年11月
- 生井知子 『白樺派の作家たち』和泉書院 2005年12月
- 山口翼 『志賀直哉はなぜ名文か』祥伝社 2006年5月
- 下岡有加 『志賀直哉の方法』笠間書院 2007年2月
- 『日本文学研究資料叢書 志賀直哉1』  
日本文学研究資料刊行会編 有精堂 1977年4月1日4版発行
- 『国文学 解釈と教材の研究』学燈社 2002年4月号
- 『精選現代文 指導資料』明治書院 2005年3月